

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

災害と地域SNS：
佐用豪雨災害で可視化された救援・復興のつながり
効果

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-09-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和崎, 宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000919

第6章 災害と地域SNS

—— 佐用豪雨災害で可視化された救援・復興のつながり効果 ——

和崎 宏

関西学院大学総合政策学部

毎年どこかで大きな自然災害が発生する日本列島。大きな災害が発生した直後、壊滅的な打撃を受けた被災地では、自助・公助・共助という支援には限界があり、被災地内部だけでなく被災地周辺の地域による素早い支援活動や遠隔地からのタイムリーな援助を促進する仕組みの運用が求められる。これには、被災地内部からの的確でスピーディな情報発信はもちろんのこと、それを被災地外部に効果的に伝搬する実践的で具体的な取り組みや実証的な研究の推進が不可欠である。

たとえ防災は防ぐことができなくても、被災地のダメージをICTの活用によって軽減しようという取り組みが、各地の地域SNSを用いて進められている。地域SNSの機能面や運用面の備えや地域住民への普及はまだ不十分ではあるが、被災地のみならず地域の枠を越えた互酬関係の強い人的ネットワークには大きな効果と可能性があり、2009年8月の佐用豪雨水害における情報伝搬の分析により、今後の展開を考察した。

- | | |
|----------------------------------|--------------------------------|
| 1 災害時における地域SNSの役割への期待 | 7 「空白の6時間」を埋めるために |
| 2 佐用町と地域情報化の概況 | —— Twitter型ショートメッセージ交流機能「コトろぐ」 |
| 3 平成21年台風9号による佐用豪雨災害の概要 | 8 地域を越えた信頼の連鎖の可視化 |
| 4 地域SNS「さよっち」による被災情報発信 | —— 佐用豪雨災害復興支援「古タオルプロジェクト」 |
| 5 地域を越えた人的連携を育んだ「地域SNS間連携API」の効果 | 9 信頼の連鎖によるつながり効果 |
| 6 減災や災害復興に役立つ地域SNSのコミュニティ機能 | —— 自治体の防災施策としての地域SNSの活用 |
| —— 外部コミュニティリンク | |

*キーワード：災害、リアル、ヴァーチャル、セーフティネット、信頼と互酬性、スケールメリット

1 災害時における地域SNSの役割への期待

大きな災害が発生した直後には、壊滅的な打撃を受けた被災地では、自助・公助・共助という支援には限界があり、被災地内部だけでなく、被災地周辺の地域による素早い支援活動や遠隔地からのタイムリーな援助を促進する仕組みの運用が求められる。これに

は、被災地内部からの的確でスピーディな情報発信はもちろんのこと、それを被災地外部に効果的に伝搬する実践的で具体的な取り組みや実証的な研究の推進が不可欠である。

総務省では、新潟県長岡市¹⁾と東京都千代田区²⁾において、2005年12月から2006年2月までの間、我が国で初めての地域SNS実証実験を実施し、その後、各地に地域SNSサイトが立ち上がるきっかけをつくった。また、「ICTを活用した地域社会への住民参画のあり方に関する研究会」(座長：石井威望東京大学名誉教授)を設置して、実証実験の成果などをもとに「住民参画システム利用の手引き」³⁾を取りまとめ、「地域社会への住民参画」や「地方行政への住民参画」を実現する上での地域SNS活用のガイドラインを示した。総務省は、この中の「実践編地域SNS・災害発生時の活用」において、日常的な利用だけでなく、災害のような非常時にも地域SNSが役立つことへの期待を示している。

その後、地域SNSは、災害救援・復興の情報ツールとして、実際に効果を発揮することとなる。2007年7月16日に発生した「新潟県中越沖地震」では、その日のうちに、長岡地域SNS「おこなご一か」に、外部公開の「中越沖地震情報支援コミュニティ」⁴⁾が設置された。ここでは、「ボランティア関連情報」「高齢者支援情報」「IT支援」「義援金情報」など、計18件のトピックが立ち上げられ、43日間に370のコメントが集まり、被災地の復興支援に情報面から貢献した。

また、2008年6月14日に岩手県内陸南部を震源として発生した「岩手・宮城内陸地震」においては、盛岡市地域SNS「モリオネット」⁵⁾が、盛岡市と運営ボランティアグループが連携して利用者全員が参加する外部公開コミュニティ⁶⁾を迅速に立ち上げ、さまざまなメディアに流れる情報を地域SNSに集約し、安否・医療・被害・対策など地域が必要とする各方面の情報交換に貢献した。「モリオネット」のケースでは、震災直前に交流を行った「おこなご一か」による災害対応の指導が役立っていた。

2009年8月11日午前5時7分、静岡県東部に震度6弱(M6.5)の地震が発生した。震源に近い掛川市では、安心安全施策のための正確な災害情報提供を目的のひとつとして、2006年11月から掛川市地域SNS「e-じゃん掛川」⁷⁾が運用されていた。「e-じゃん掛川」にあらかじめ設置されていた「災害コミュニティ」⁸⁾には、地震発生後1時間以内に災害情報が書き込まれ、当日のコミュニティへのアクセス数は4,885件に上った⁹⁾。「e-じゃん掛川」では、稼働以来3年間、毎年12月の県下一斉の防災訓練、9月1日の防災訓練で、「e-じゃん掛川」を使った訓練を行っているが、この効果が現実の災害時に可視化されたといえる。現在では、市の防災担当課が、大雨警報時や台風が接近したときなどに必ずトピックを作成して、引き続き行政による災害情報の提供を行っている。

地域SNSの機能面や運用面の備えや地域住民への普及はまだ不十分で、その効果は、サイトの利用者またはサービスエリア内に限定される傾向がある。しかし、突然発生する災害に対しては、地域SNSなどネットを活用した想定シミュレーション訓練や他地域

の経験知を学ぶアーカイブスの取り組みが有効であることは明らかであり、これまでの事例のように、主に災害関連情報の発信・交流に一定の役割を果たし始めている。昨今、徐々に地域 SNS サイトの設置が全国各地に拡大するにつれて、地域の枠を越えた具体的な災害復興支援活動にも地域 SNS の効果につながるのではないかと、関係者から期待されるようになってきていた。

2009年8月、兵庫県西部にある過疎の町・佐用町が、豪雨による水害に見舞われた。この時、町が運営する小さな地域 SNS サイト「さよっち」では、被災住民らによる民間レベルの多様な災害情報の発信を起点として、地域を越えた復興支援活動を創発するという現象が発生した。日頃から「さよっち」を介してつながりのある、他の地域 SNS サイトの利用者らが媒体となって、放射状に伝搬した災害情報が、自発的で多様な支援を被災地内外に顕在化させたのである。小規模ではありながら、「さよっち」で起こった地域 SNS による災害救援・復興のプロセスは、その役割と可能性を考察する優れた事例である。

2 佐用町と地域情報化の概況

佐用町は、2005年に旧佐用町と上月町、南光町、三日月町が合併し、新たに佐用町として発足した人口約2.1万人、面積約307キロ平方メートルの、兵庫県西部に位置する過疎の町である。現在では、年々人口減が進んでいるが、江戸時代には兵庫県姫路市と鳥取市を結ぶ因幡街道最大の宿場町として栄え、現在では約150万本を誇るヒマワリ畑や、口径2mを誇る世界最大の公開望遠鏡を持つ天文台など、多くの観光資源が人気を集めている。

一方、情報通信の分野では、町内の8割が難視聴地域でFM放送もNHK以外はほとんど聴取できない。また、インターネットもADSLが整備されているものの、局舎から遠い地域では満足なスピードを確保することができない状態である。そこで町では、合併特例債¹⁰⁾を活用し、2007年度から2ヶ年で、民間のCATV事業者から町のセンターを経由して、全ての家庭や公共施設等をネットワーク「光ファイバー網」で結んだシステムを構築し、町内全域の放送・通信機能を、都市部に相当するレベルに引き上げる整備を行った。また、2006年度には、光ファイバー網の活用を検討するための有識者会議「佐用町情報懇話会」¹¹⁾を設置し、1年間にわたる討議を行った。

佐用町情報懇話会の提言の柱となったのが、CATV・インターネットTV・地域 SNS の融合的運用と、その仕組みを支える人的基盤としての「住民ディレクター」¹²⁾の展開であった。地域 SNS によって、住民の信頼と支え合いの関係を醸成しながら、住民ディレクターが制作したコンテンツを地域 SNS のインターネットTV機能を使って発信し、その一部をCATVの町営チャンネルにより放送することにより、住民生活の活性と向上

を目指すものであった。2007年度に、姫路ケーブルテレビ株式会社がCATVとインターネット接続サービスを順次開始、同年8月からは、岸本晃氏自らが定期的に佐用町に入り住民ディレクターのプログラムをスタート、同年10月には、財団法人地方自治情報センター（LASDEC）¹³⁾からの補助事業として開発が進められていた地域SNS「さよち」¹⁴⁾が運用をスタートするという形で、佐用町情報懇話会の提言は、早々に実現されることとなった。

3 平成21年台風9号による佐用豪雨災害の概要

2009年8月9日の夜、この静かな山あいの町が、平成21年9号台風による未曾有の豪雨¹⁵⁾に見舞われ、普段は穏やかな清流を湛える千種川支流の佐用川、幕山川などが、至る所で氾濫や堤防の崩壊を起こし、町全体が濁流と土砂に呑み込まれた。佐用町によると¹⁶⁾、被害は、死者18名、行方不明者2名、全壊136棟¹⁷⁾、大規模半壊259棟¹⁸⁾、半壊481¹⁹⁾、床上浸水160棟²⁰⁾、床下浸水579棟²¹⁾を合わせると、町内の約1/4の世帯が被害を受けるという大惨事²²⁾になった。

佐用町役場近くにある佐用川の水位計は、9日午後7時58分に3mとなり、僅か1時間後の午後8時40分には川から水があふれる可能性が高い「はんらん危険水位」である3.8mに達した。地上3階建ての町役場では、午後7時頃に災害対策本部を設置。職員約50人が1階の住民課に集まったが、町内全域に避難勧告を出した同9時20分頃に突然玄関のガラス扉が壊れ、一気に大量の濁流がフロアに流入。その水かさは一時間で約1.5m



写真1 佐用町三河～海内の峠山中から大量に流出した倒木が、河川の構造物に滞留し、洪水被害を拡大させた。2009年8月15日撮影。

出典：岡本敏和氏²³⁾
(佐用町仁方在住)



写真2 姫新線上月駅東踏切線路の盛り土を流され、流下物に覆われたJR姫新線は、被災後約2ヶ月間不通になった。2009年8月16日撮影。

出典：岡本敏和氏²³⁾
(佐用町仁方在住)



写真3 佐用町商店街栄町付近。大量の土砂が濁流と共に流れ込み、多くの車両や家財道具が廃棄された。浸水した家屋の復旧には早いところでも数週間を要した。2009年8月12日撮影。

出典：岡本敏和氏²³⁾
(佐用町仁方在住)

に達し、瞬く間にコンピューターや書類が泥水につかった。職員らは総務課などの入る2階に移動したが、役場内は非常用電源も浸水して停電が続き、被災情報のとりまとめもできない状態となった。この間も、「家に水が入ってきた」「裏山の土砂が崩れた」と住民からの電話がひっきりなしに鳴り続けた。町では避難勧告を町内放送でアナウンスしたが、「ゴーツという水音で何も聞こえなかった」という住民も多かったという。防災拠点である町役場が浸水して、防災無線や町のホームページが不通となり、全町に敷設した光ファイバーによるケーブルテレビ網も断線、町内のほぼ全域が停電してテレビやラジオも役に立たず、佐用町はまさに陸の孤島と化した。

4 地域SNS「さよっち」による被災情報発信

町が大混乱に陥っている中、被災地から40km離れた姫路市内でホスティング²⁴⁾されている佐用地域SNS「さよっち」のサーバーは、今回の豪雨の影響は受けることなく通常通り稼働していた²⁵⁾。直接被災した人々には、地域SNSを使って情報を発信する余裕はほとんどなかったが、それでも、被災当日から未明までに、被災状況や安否確認などがブログを使って書き込まれた(表1参照)。

「さよっち」のSNSエンジンであるOpenSNP²⁶⁾(Open Social Networking Platform)

表1 被災直後における「さよっち」ブログへの水害関係の投稿

書込日時	閲覧数 ²⁹⁾	返信数	書込概要	公開状況 ³⁰⁾	発信者所在
08/09 21:41	40	11	兵庫防災情報から、午後9時現在、佐用川源流で47mmの時間雨量を記録したことを報告。警戒を呼び掛ける。	全体公開	近隣市町 在住者
08/09 22:39	42	6	実家(豊福の平谷)の崖崩れ、家屋崩壊、川の氾濫、田畑の浸水などの被害を報告。対処方法を呼び掛ける。	全体公開	県外在住 町出身者
08/09 22:47	55	7	役場の冠水や自宅の浸水状況、及び雨量の減少を報告。	全体公開	佐用町住民
08/09 22:49	40	8	被害状況を知らせるブログを読んで見舞いを掲載。	全体公開	他府県在住
08/09 22:55	40	3	佐用駅前被害状況を報告。冷静な対処を呼び掛ける。	全体公開	県外在住 町出身者
08/09 23:12	330	15	佐用町内の被害状況を、現地の対応の様子とともに詳細に報告。情報が繋がらない現状に課題提起。	外部公開	佐用町住民
08/10 02:57	238	6	断水・停電・情報遮断の状態を報告。ブログからコミュニティに書込を誘導、共有化を図る。	外部公開	佐用町住民

筆者(2009)がブロッグ一覧機能により抽出して作表。

のブログには、写真及びファイルの添付機能や地図連携機能だけでなく、公開・コメント制御機能、インターネットTV²⁷⁾と連携した動画掲載機能²⁸⁾などが搭載されている。これら特徴的な機能は、単なる情報発信ではなく、よりクオリティの高いコミュニケーションを実現できるようになっており、佐用豪雨災害においてもその効果をいかんなく発揮していた。

ブログ毎に、[外部] [全体] [トモダチ]³¹⁾と分けて公開やコメントを許可できる機能は、平常時には書き込む内容の一般性や汎用性によって分類される傾向があるが、災害時には緊急性や公益性の高い情報が外部公開に設定されており、またプライバシーに配慮して公開制限されているケースも見られるなど、「さよっち」では適切な利用が行われていた。外部公開のブログは、「さよっち」のログインページで外部からそのまま参照できるだけでなく、検索エンジンからもサーチし参照できるので、[全体公開]や[トモダチ公開]のものと比較³²⁾すると、その閲覧数は遙かに多くなっている。従来のSNSのサイト設計は、ユーザーを囲い込むために、情報を外部に持ち出しにくい仕組みになっているものが多いので、外部公開機能を有していないものもあるが、災害時などには外部への発信が重要性を増すことから、平常時においても外部公開機能を提供しておくことが必要である。

被災から3週間の間に、「さよっち」ではブログを通じて、写真73点、地図情報15件、動画13点が公開された(表2参照)。ブログの中には、町の職員が避難所からの報告をとりまとめて書き込んだり、派遣された被災地から、復興ボランティアの重要な参考情報となる現状報告をほぼ毎日のように行って刻々と変化する現場ニーズを外部に連携することで支援活動を間接的に支えるなど、効果的な役割を担うものが少なくなかった。同じ豪雨で被災した隣接する宍粟市では、交通途絶した宍粟市福知地区の状況を把握しようと、県庁から被災翌朝に防災ヘリが飛ばされたが、悪天候による視界不良のため状況不明のまま引き返すということがあった。その日の正午前、第一報が福知地区の消防団隊員から地域SNS「E-宍粟」によって被害状況が発信され、初めて安否確認ができたという事例も報告されている³³⁾。

また、マスコミから報道されなかった被災各地の被害状況が、地域住民が携帯動画を使って即時にレポートされていたり、住民ディレクターとして活躍している住民が中心となって、各地の被害・復興状況を番組制作し、インターネットTVやケーブルTVから続々と放映されるなど、これまでの災害現場から整理されて発信することのなかった情報が、ほぼリアルタイムに入手できた。

被災後5日間の「さよっち」への接続は、訪問数、ページビュー³⁵⁾ともに、被災前の2倍から3倍に達しており、特に被災直後には情報ツールとして活発に利用されていたことがわかる(図1参照)。また、月次の推移をみても、被災3ヶ月間のログが被災前の実績を上回っており、「さよっち」は継続的に利用されていた(図2参照)。

表2 水害関係の「さよっち」ブログ公開制限別投稿・閲覧状況³⁴⁾ 2009年11月1日現在

日付	外部公開ブログ						全体公開ブログ						トモダチ公開ブログ					
	投稿	ACC	COM	PHO	MAP	MOV	投稿	ACC	COM	PHO	MAP	MOV	投稿	ACC	COM	PHO	MAP	MOV
8/09	3	612	19				8	259	43									
8/10	12	3450	56	11	9	4	5	138	14									
8/11	2	366	8				11	457	37	1	1		1	18				
8/12							13	280	22	4			2	26	4			
8/13	5	2196	29				5	101	14									
8/14	4	656	19	8			5	125	18									
8/15							5	70	9									
8/16	1	246	15				6	215	24				6	198	18	3		
8/17	4	837	18	5			6	263	8	1								
8/18	5	832	10	1		1	1	59	8	1								
8/19	3	455	14	1			4	93	16	1								
8/20	6	1104	25	1		4	1	218	6				2	44	3			
8/21	4	886	26	2	1	1	4	73	6									
8/22	1	186	4	1			3	79	14	1			1	10				
8/23	7	1112	19	2			10	248	26	5		1	1	132	11			
8/24	2	399	12	1									1	9	2			
8/25	6	1050	16	8	1		3	91	12	3								
8/26	3	435	13	1		1	6	157	23	3		1						
8/27	2	330	10	1	1		4	111	14	1								
8/28	3	364	6	1	1		1	15	2									
8/29	3	286	4	4	1		2	94	19	1								
合計	76	15802	323	48	14	11	103	3146	335	22	1	2	14	437	38	3	0	0

筆者（2009）がブログ一覧機能により抽出して作表。

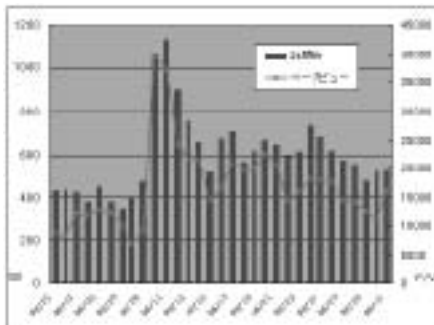


図1 被災前後の「さよっち」アクセスログ
日次集計
筆者（2009）がアクセスログ解析データから
抽出して作図。

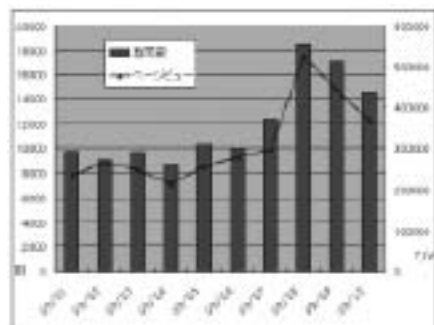


図2 被災前後の「さよっち」アクセスログ
月次集計
筆者（2009）がアクセスログ解析データから
抽出して作図。

5 地域を越えた人的連携を育んだ「地域 SNS 間連携 API」の効果

地域 SNS では一般的に、サイトにログインすることによってリソースにコンタクトできるようになっているが、複数のサイトに登録しているユーザーがすべてのサイトの情報を入手しようとするれば、それぞれのサイトに別途にログインする必要がある。サイト数が少数なら負担にはならないが、多くのサイトに参加している場合は負担が大きく、どうしても一部のサイトのログイン頻度は次第に低下する。しかし、多数のサイトに登録しているアクティブなユーザーの中には、サイト間の橋渡し役を担っているものが少なくなく、彼らはサイトの活性にとって大変重要な存在である。

「アクティブな人ほどアクセスに負担を感じる」という課題を解決すべく、平成20年度に LASDEC で開発されたのが、「地域 SNS 間連携 API (以下、連携 API)」システムである。このシステムは、異なるエンジン間であっても同一ユーザーであれば、自身の関心情報を一括して取り扱うことができるように考案された通信手順で、2009年10月現在、OpenSNP と OpenGorotto (総務省版) が対応している。複数の地域 SNS サイトに登録しているユーザーが、自分が主に利用するサイトに、その他のサイトの暗号化された専用の「アクセスキー」を登録すると、主サイトのユーザートップページ (マイページ)³⁶⁾ に、連携サイトの「新着メッセージ」「トモダチ依頼」「管理コンテンツ情報」などが表示される³⁷⁾。また、マイページにある「連携サイトの新着情報一覧」では、すべての連携サイトの「トモダチ最新ブログ」「最新マイブログコメント」「コミュニティ最近書込」が一覧表示されるので、取得すべき情報の有無を確認するために、それぞれのサイトにログインする手間を省くことが出来る。

「さよっち」には、親サイトとなる「ひよこむ」³⁸⁾ はもちろんのこと、同じ LASDEC の助成プログラムで立ち上がった「まつえ SNS」³⁹⁾、「モリオネット」との間で、コアメンバーを起点とした人的連携が構築されていた。また、OpenSNP を採用する近隣サイトである「いたまち SNS」⁴⁰⁾、「さんでい」⁴¹⁾、「E-宍粟」は、「ひよこむ」を中心としたユーザー同士の緊密な人的ネットワークがあり、これらつながりを持った人たちは、頻繁に互いの地域を訪問しあったり、共同プロジェクト⁴²⁾ を運営するなど大変濃密な交流を実践しており、連携 API が日常レベルの情報共有に大きな役割を担っている。小さく無名の地域 SNS「さよっち」の情報が、広範な人々を支援へと向かわせる動機付けとなることを可能にしたのは、「さよっち」のユーザーが普段から外部のネットワークのキーパーソンたちと日常的に接続された状態であったことが大きな要因と考えられる。

6 減災や災害復興に役立つ地域 SNS のコミュニティ機能 —— 外部コミュニティリンク

地域 SNS のコミュニティは、それぞれのテーマや話題について語り合いたいユーザーが集まる掲示板型のコミュニケーション機能である。通常は、ユーザーがカテゴリを選択して自由に立ち上げることができ、参加方法を「自由参加」か「承認必要」とすることでコミュニティの参加制御を行い、「外部公開」「全体公開」「メンバーのみ」を選択することで情報公開制御を行う。OpenSNP では、「実名表記」「全員参加」「公認」などの付加機能を、システム管理者がコミュニティ毎に設定することが可能である。例えば、公的な位置づけの高い会議や委員会での議論を行う場をコミュニティとして設置する際には、匿名性の高いハンドルネームに抵抗感のある人も少なくないことから、「実名表記・非公開・承認必要」にするなどである。また、コミュニティ管理人⁴⁴⁾が「外部公開」「自由参加」とすることで、コミュニティをログインしない利用者にも開放する⁴⁵⁾ことができる。

地域 SNS では、この外部公開と全員参加機能を利用して、災害関連の情報を集約するコミュニティ⁴⁶⁾を設置しているサイトが少なくない。このコミュニティでは、地震や風水害などの災害発生時または災害発生が想定される台風接近時などに専用のトピックを立てて、ユーザー全員と情報を共有することで復興支援や防災対策を行うものである。従来の地域 SNS エンジンでは、このようにひとつのサイト内で情報共有を行うことが情報共有の限界であったが、今回の豪雨災害の事例のように、佐用や宍粟という複数の地域に大きな被害をもたらす災害⁴⁷⁾対応には、救援・支援・復興の各段階において、外部のネットワークとの接続が必要となる。このニーズに対応するのが、サイトの枠を越えて災害情報を共有する OpenSNP の「外部コミュニティ連携」機能である。

OpenSNP の外部公開コミュニティには、それぞれに RSS フィード⁴⁸⁾が与えられており、コミュニティ管理人が、連携したい別サイトの外部公開コミュニティの RSS フィードを登録することによって、相手コミュニティで情報が更新されるとコミュニティトップの「コミュニティリンク新着一覧」が書き換えられて、最新の災害情報が入手できるようになっている。これを地域 SNS 各サイトで相互に張り巡らせることによって、災害情報の全国ネットワークをつくることができるのである。この外部コミュニティリンクの応用として、公共災害情報サイトの RSS フィードを登録することによって、逐次更新される信頼できる行政などからの災害情報を地域 SNS に組み込むことが出来る。地域 SNS の災害コミュニティは、単なるユーザー間の情報交流・共有ではなく、信頼性はまちまちながら災害のリアルタイム情報の集積場所となる可能性がある。



図3 災害情報コミュニティの例
筆者(2009)が「ひよこむ」の災害関連情報コミュニティのトップ画面からキャプチャー。



図4 コミュニティリンク新着情報の一例(ひよこむ)
筆者(2009)が「ひよこむ」の災害関連情報コミュニティのトップ画面からキャプチャー。

表3 災害対応に使用された外部公開公認「さよ姫ひろば」投稿・閲覧状況⁵⁰⁾ 2009年11月1日現在

日付	TOP	COM	ACC	PHO	MAP	日付	TOP	COM	ACC	PHO	MAP	日付	TOP	COM	ACC	PHO	MAP
8.09	1	3	905			8.16	0	2				8.23	0	2			
8.10	6	35	1983	6		8.17	3	3	466		2	8.24	0	3			
8.11	5	18	674		2	8.18	2	3	133			8.25	1	5	76		
8.12	4	10	810			8.19	0	3				8.26	0	1			
8.13	5	19	608	35	1	8.20	3	6	818			8.27	0	3			
8.14	7	10	321			8.21	0	3				8.28	0	2			
8.15	6	7	447	15	2	8.22	0	1				8.29	0	2			
												計	43	141	7241	56	7

筆者(2009)がコミュニティトピック一覧機能により抽出して作表。

7 「空白の6時間」を埋めるために

—— Twitter型ショートメッセージ交流機能「コトろぐ」

1995年1月17日早朝、姫路の自宅の居間で経験したことのない大きな揺れを感じた筆者は、まず家族の安否を確認し、自宅やご近所に被害がないことが判るとTVの前にかじりついてた。しかし、当初はどこからもほとんど情報らしいものを入手することはできなかった。しばらくして、震源が兵庫県南東部だという情報とともに、あちこちから火の手があがる神戸・長田地区のヘリ中継が目に入った。筆者は救援活動に参加しようと、すぐに所属していた姫路青年会議所の事務局に駆けつけたが、携帯電話がまだ十分に普及していない時代だったこともあり、阪神間のメンバーと連絡をつけることは至難の業であった。現地の状況がまったくつかめない中で対応を検討する会議が行われ、断片情報から想定された現地の状況を頼りに、それぞれの役割分担が決まったのは午後

1 時前になっていた。このように、情報の枯渇が初動の救援に大きな障害となったのは、阪神淡路大震災が最初ではなく最後でもなかった。

15年前との違いは、情報通信インフラの整備が進み、全国各地からブロードバンド⁵²⁾でインターネットに接続できるだけでなく、携帯電話網の急速な発達でだれでもどこでも情報に接触できるようになっていることである。兵庫県では、近い将来、直下型地震を起こすであろうと予想されている「山崎断層」⁵³⁾沿いに、西から「さよっち」、「E-宍粟」、「さんでい」、「いたまち SNS」という地域 SNS の拠点が並び、地域を越えた人的なつながりが生まれ育ちつつあった。兵庫県では、一般的に、支援者たちが素早く適切な対応を行うため、被災直後の「空白の6時間」を解消する情報基盤はほぼ整いつつあると考えられていた。しかし現実には、自ら被災した状態でパソコンを開き、冷静に情報発信できる人は少なく、携帯からの情報提供もブログやコミュニティを利用する限り、発信までの手続きが煩雑で手間がかかりすぎる。「短文でもよいから、簡単に素早く情報をポストできる仕組みが必要」とのニーズから、OpenSNP では、多数の若者から支持を受けているショートメッセージコミュニケーター「Twitter」を手本としたシステム「コトろぐ」を開発・実装することとなった。

「コトろぐ」は、PCならマイページで常時表示と随時入力することができ、携帯ならメインメニューからワンステップで書込画面にいけるといふ簡易なインターフェースで、全角文字で約50文字程度のメッセージが残せる。OpenSNP を ASP 形態によるホスティングサービスで利用している20サイト以上で、ひとつのボードが共有されるようになっており、すべてのサイトのユーザーが閲覧する可能性がある。この「コトろぐ」の連携環境を活かして、被災直後に現場から緊急で発信された短文の情報を、さまざまなロケーションにある全国各地のサイトで受信することができれば、空白の6時間の解消と支援体制のスムーズな構築に役立つと考えられる。そこで、2008年12月に「コトろぐ」の試用版を実装するとともに、2009年1月には山崎断層を震源とする直下型地震が発生したことを想定した「OpenSNP 連携1.17 ネット防災訓練 2009」⁵⁴⁾を実施、震災発生時のシミュレーションを行った。

普段の「コトろぐ」は、お天気や身の回りの小さな出来事、鉄道の遅延情報などが、つぶやきのように書き込まれるのみであったが、「E-宍粟」が震源地となり、近隣の「さよっち」が大被害を受けたというストーリーの防災シミュレーションでは、6時間で700件近い情報が書き込まれ、迫真のメッセージに感動で涙するなど感情移入する参加者も少なくなかった。いみじくも、訓練の主舞台となった2つの地域 SNS のカバーエリアが、半年後に豪雨水害の被災地となり、シミュレーションで活躍してくれたアクターが、実際の救援・復興における情報発信の中心的な役割を担ったことは皮肉である。そして、災害時の情報ネットワークには、事前の防災訓練が大きな効果をもたらすことを、現実の災害が明らかにした。

一般的に、人的関係が薄い遠隔地で起こる災害については、人間は無頓着であり、ましてや支援に動き出すことは少ない。対して、肉親や友人がいる（いた）地域での災害情報には、「東アジアの相互扶助意識」⁵⁵⁾から、支援動機が働きやすい。近隣で発生した災害であれば、情報に接することで多くの人々が善意の救援行動を起こしやすいということである。正確性や公共性は少々低くても、災害発生直後の被災情報が、普段の人的つながりを經由して支援者たちに伝わることで、事前に想定されるより遙かに大きな支援効果をもたらす⁵⁶⁾可能性は高い。

8 地域を越えた信頼の連鎖の可視化

—— 佐用豪雨災害復興支援「古タオルプロジェクト」

2004年10月20日、日本列島を縦断した超大型の平成16年台風23号は、停滞していた秋雨前線の影響もあって大量の雨を全国各地に降らせ、とくに兵庫県豊岡市においては一級河川の円山川が決壊し、市街地の大半を水没させた。兵庫県立大学環境人間学部岡田真美子ゼミが主体となって地域通貨実験を行う「NPO法人千姫プロジェクト（以下、千姫プロジェクト）」⁵⁷⁾では、10月23日から3日間、タオルや雑巾を集めて被災地に届ける「千姫タオルプロジェクト」を実施し、5,000枚のタオルや雑巾を被災地に送った⁵⁸⁾。

被災翌日の午後、断水で困窮する「さよっち」メンバーに届けるために、飲料水を満載した車両で佐用町中心部に入った「ひよこむ」メンバーは、アスファルトの道路があちこちで破断し、道路沿いの民家が軒並み崩壊している現場を見て、小学生の頃に救援用の医薬品を一杯詰め込んだリュックを背負って、父親と一緒に歩いた阪神淡路大震災の惨状を彷彿とさせた。「佐用坂を下りるとそこには美しい佐用の町はなく、まったくの別世界だった」と彼が回想するように、未曾有の大惨事に見舞われた町の情景は、「(救援・復興のために)何かを始めなければ」という強い動機を彼に与えた。その時、記憶に甦ったのが、豊岡水害の際の「千姫タオルプロジェクト」であった。

災害情報に接することで、人が感じる動機付けの強さは、親近感や距離などその環境によってさまざまである。また、救助・救援・復興の各段階において、被災地で必要とされる物資も変化する。被災地での経済活動につながる義援金が、ボランティアの人的支援を除くと比較的有效性が高いと言われているが、善意を表現したい人の中には「お金」で済ませることに物足りなさを感じる人も少なくない。千姫プロジェクトの集めた古タオルは、吸水性が良く浸水した家屋の清掃に大変重宝するだけでなく、誰の家にも使い古されたタオルが洗面所などにあって、誰でも支援活動に参加しやすいというメリットがあった。佐用での被害状況から、「1万枚」という目標を立てて、8月12日から15日までの4日間、姫路のひよこむ事務局を受け取り先に指定して、「古タオルプロジェクト」が立ち上がった。11日午前、「ひよこむ」の全メンバー⁵⁹⁾とOpenSNPを利用する各

サイトの運営主宰者宛に、協力依頼のメッセージが送付された。

2009年8月11日

【(仮称)平成21年兵庫県西播磨豪雨災害復興支援事業～古タオルを送ろうプロジェクト】にご支援をよろしくお願ひします。

ひよこむユーザー（ひよこまー）のみなさま、いつもお世話になります。

ここ数日、豪雨や地震など、全国各地で自然災害が発生していますが、皆様の地域やお仲間には被災されたりはしておられませんか？

この度、ニュース報道でご存知の通り、「ひよこむ」と同じ地域SNSの仕組みである「OpenSNP」を使っている連携サイト、佐用地域SNS「さよっち」としそ地域SNS「E-宍粟」の拠点である兵庫県佐用町（人口約2万人）と宍粟市（人口約4万1千人）では、8月9日夜から10日未明にかけて、記録的な集中豪雨に見舞われ、大きな被害が出ました。

神戸新聞の報道などによると、11日午前現在、兵庫県内の死者は佐用町と朝来市で計12人。同町と豊岡市で16人が行方不明となっています。また、兵庫県内の6市2町で3世帯が全半壊し、500世帯が床上浸水、802世帯が床下浸水しました。

佐用町によると、10日夜も小学校など町内27カ所に708人が避難。宍粟市一宮町福知では道路寸断で住民や宿泊者ら35人が依然、孤立しています。佐用町では役場自体が浸水し、防災無線・CATVなどの情報系も機能しない状態が続いており、その中で「さよっち」が動画や画像を交えた現地の生レポートを発信し、注目を集めています。

「ひよこむ」では、「さよっち」「E-宍粟」のメンバーの多くが暮らすこの地を襲った豪雨災害からの早期の復興を願って、古いタオルを集めて被災地へ送る支援プロジェクトを開始しました。皆様のご家庭に眠っている古いヨレヨレのバスタオルや縫い目が解けたようなフェイスタオルは、浸水した住居・施設の清掃などに大活躍してくれます。ぜひとも使い古して吸水性の良くなったお手元の古タオルを、被災地復興のために譲って下さい。

タオルは、ひよこむ運営事務局のあるインフォミーム社が受け入れ、ひよこむのPR車「ひよこむカー」で直接、佐用町と宍粟市の支援団体にお届けします。

以下の住所、送り方などをご覧の上、ぜひご協力をよろしくお願ひします。

【送り先】

〒670-0061 姫路市西今宿3-6-3

インフォミーム株式会社内 OpenSNP 西播磨豪雨災害復興支援プロジェクト

TEL. 079-295-2700 FAX. 079-294-6552

【受付期間】

2009年8月12日（水）から、8月15日（土）の午前中必着！（持ち込みも同時刻でお願い致します）

【送付方法】

紙袋にタオルをつめ、半分ほどガムテープで口を閉めて、宅配便の伝票はそのまま紙袋に貼ってしまってください。大量の場合は、ダンボール箱に詰めてご送付をお願いします。

送り状には、送り主（複数の場合は代表者）・メールアドレス・タオルの枚数、を記入下さい。メールアドレスは、プロジェクト終了後に感謝状をお送りするアドレスとしてだけ使います。

【受け入れ先】

- 佐用町まちづくり課副課長・久保（まっち）さん 「さよっち」 運営管理者
 - 宍粟観光協会会長・宍粟市議・寄川（やっちゃん）さん 「E-宍粟」 運営管理者
- 【現地災害情報コミュニティ】（外部公開ですので、ログインしなくても参照可能です）

- ・「さよっち」

『【公認】 さよ姫ひろば』 http://sayo-chi.jp/community.php?bbs_id=9

- ・「E-宍粟」

『宍粟市豪雨災害情報コミュ』 http://shiso-sns.jp/community.php?bbs_id=89

- ・「ひよこむ」

『災害関連情報コミュニティ』 http://hyocom.jp/community.php?bbs_id=506

以 上

（文責）「ひよこむ運営事務局」担当・和崎一峻（ワッキー）

.....

善意善行のメッセージは、インターネット上でチェーンメール化⁶⁰⁾しやすい。千姫プロジェクトの岡田代表からの助言で、制御不能のメールリレーに陥らないように、募集期間を短く設定し、活動内容の伝達に関する依頼は書き込まなかった。しかし、上記のメッセージを全文引用する形で、所属するメーリングリストで依頼したり、個人のブログで支援を呼び掛ける人が続発した。佐用へ古タオルを送ろうという活動は、影響力の強い人の呼び掛けに呼応した善意の人の鎖を経由して拡大⁶¹⁾していった。北海道赤平市では、「ひよこむ」ユーザーの兵庫県内の自治体職員からの呼び掛けに、ひとりの市職員が古タオル集めを始めた。これが偶然、市長の耳に入り説明を行ったところ、市長自らが旗振り役となって活動が市内のあちこちに拡大した。赤平市は約1万枚のタオルを佐用に直接送った。伊丹では、夏休み中にも関わらず、高校生たちが古タオル集めに奔走した。それぞれ教師や生徒の家庭から学校に持ち込まれたタオルは約7,000本。お盆休みのラッシュに巻き込まれながらも、伊丹―姫路間を2往復して、若者達の善意は事務局に届けられた。松江 SNS で集められた古タオルは、メンバーの手で直接佐用の被災地に運び込まれた。尾道 SNS は、お寺に集められたタオルを、メンバーの主婦がひとり高速道路を走って事務局に持ち込んだ。個人はもちろんのこと、全国各地の地域 SNS や社会福祉協議会、役所、企業、ボランティアグループなどからも、それぞれに取りまとめられたタオルが運送便で到着した。1万本を目標としてスタートしたプロジェクトであったが、期間中に計26,495本ものタオルが事務局に届けられることとなった⁶²⁾。

事務局に届いたタオルは、ボランティア⁶³⁾の手で開梱されたあと、新品タオル（大・小）と古タオル（大・小）、およびその他のタオルに分類され、再度ダンボール箱に入れられた。これは、被災地での仕分けの手間を省くための作業である。支援物資集積センターで担当者が分かりやすいように、内容のラベルを箱に貼り付けてから、現地入りする作業ボランティアの方々の手も借りながら順次被災地に搬入した。現地搬入に際して

は、役所の担当者と緊密な連携をとりあって、必要とされる数だけ指定された集積施設に運び込むことに心がけた。このように、被災地に負担をかけることなく、適切に資材を供給するためには行政との連携が重要であり、今回のひよこむ事務局が果たした役割のように、一気に資材が被災地に集中することへの緩衝機能を果たす拠点の存在が不可欠である。結果、ひよこむ事務局には約13,000本の古タオルが仕分けされた状態で残った。せっかく全国から佐用に頂いた善意ではあるが、これは将来、災害に遭遇してしまった地域の支援のために活用させてもらう「宝物」として、大切に保管されている。

9 信頼の連鎖によるつながり効果

— 自治体の防災施策としての地域 SNS の活用

各地の地域 SNS が「古タオルプロジェクト」を呼び掛けている中で、横浜地域 SNS 「ハマっち！」が告知したメッセージが、8月12日の YahooNEWS で紹介された。検索エンジンのポータルサイトのトップにラインナップされ、記事は膨大な数のインターネット利用者に閲覧された。関係者が懸念したのは、大量のタオルが受け入れ先である横浜の事務所にまとめて届くことであった。千姫プロジェクトでも、募集期間内はゼミ室が一部屋タオルで潰されていたし、ひよこむ事務局でも一時駐車場がまったく利用できないくらい支援のダンボール箱が積み上がった。YahooNEWS の記事に触発された方々からの支援の古タオルで、「ハマっち！」の事務局の日常機能がマヒすることは、ほぼ避けられないと考えたからである。

しかし、「ハマっち！」事務局に届けられた古タオルは、約760本に止まった。佐用の豪雨水害の被害状況は、マスコミから全国各地に繰り返し報道されていたので、情報の偏在は少なかったにもかかわらず、26,000本以上が集まった「ひよこむ」ルートと大きな差異が出た理由は、情報の経路の違いであったと推測される。「ひよこむ」ルートの場合、善意のメッセージが情報発信元から日常のつながりを辿って、放射状に連鎖する形態の情報リレー⁶⁴⁾で伝搬していた。「信頼の連鎖」を経由して情報が届けられることにより、受け手に信憑性や価値観が高いレベルで認知され、直接的な行動につながる動機付けが行われたと考えられる。これに対して、YahooNEWS に取りあげられた「ハマっち！」ルートでは、より多くの人が情報に接していたが、その内容が一般的な知識情報として捉えられ、行動を起こす動機付けが起らなかったと考察される。

このように、地域 SNS を発信源とする情報が、サイト内部に止まったり、単純に外部に露出されるだけでなく、連携した SNS サイトに散在する信頼の連鎖をとって、より広域にかつクオリティを保持したまま拡大していくプロセスは、災害のみならずさまざまな情報を地域の枠を越えて効率的に伝搬する手法「クチコミネットワーク」として活用できる。「さよっち！」では、水害直後に被害状況を知った「ひよこむ」に参加している

愛知県の災害ボランティアのメンバーが、8月13日には防災バスで現地入りし復興センターの運営などについて支援活動を行ったり、阪神間の大学生たちが地域SNSを通じてつながりのあった村落に常駐して被災家屋の復旧作業を行ったり、サイトでボランティアを募りグループで何日も被災地復興に加わったり、各地のメンバーが多数、復興支援バザーや復興イベントのサポートを行うなど、さまざまな場面で地域SNSのネットワークが活用された。佐用町という全国的にも無名の僻地を主たるエリアとする、500名程度の小さな地域SNSを通して、品質の高い数多くの災害情報がやりとりされ、それに動機付けされた人々による多様な復興支援が実現したことは、さまざまな犠牲を払いながらも積極的に被災地からの情報発信に努める住民たちと、連携関係にある全国各地の地域SNSサイトに参加するユーザー間の、日常的な信頼のつながりが存在していたからである。

しかし、今回の佐用豪雨水害において、地域SNSがその持てる機能を十分に発揮できたとはいいがたい。災害対応においては、民間レベルの人的ネットワークによる支援活動と行政の組織的救援・復興システムの適切な連携が必要となる。この関係を被災時にスムーズに実現するためには、行政情報の発信と地域住民のゆるやかな連携が、地域SNSにおいて日常的に行われていることが求められる。「さよっち」では、行政の情報化施策としての「地域住民による番組制作とコンテンツ配信」については大きな成果を残したが、行政的活用や行政職員の利用はあまり進んではいなかった。災害発生後は、行政職員が中心となり、そこに他市町からの応援の職員も加わって、各地の復興支援拠点の中核となって活躍したが、目前の課題に忙殺されてしまい、それぞれの拠点からの情報を的確に発信することがほとんどできなかった。

佐用町において、地域SNSの行政活用がより積極的に行われていれば、職員自身の人的ネットワークが広がり、復興拠点内の情報がつながりのある住民やボランティアとの協働作業でアウトプットできただけでなく、張り付いた職員が少しできた余裕の時間を使って、現場に流入する情報を総合的に分析することによって、よりの確でタイムリーな支援活動が展開できたことは容易に想定できる。甚大な被害を与える自然災害は、いっどこで発生してもおかしくない。佐用豪雨災害の対応をきっかけとして、全国各地の自治体が防災・減災の取り組みを通して、行政としての地域SNSの日常的利用を前向きに検討し、地域住民とともに積極的な運営を推進されることを切に願う。

注

- 1) 「おこなごーか」は、2005年12月16日～2006年2月15日まで62日間を実証実験実施期間として設置。実験終了時は、登録モニターは307名、64コミュニティで交流が行われた。総務省実験終了後も「NPO法人なごか生活情報交流ねっと」によって継続運用され、会員数

- は1,161名(2009年11月18日現在)。
- 2) 千代田区地域 SNS「ちよっピー」は、2005年12月16日～2006年2月15日まで62日間を実証実験実施期間として設置。実験終了時は、登録モニターは903名、125コミュニティで交流が行われた。総務省実験終了後も「財団法人まちみらい千代田」によって継続運用され、会員数は2,509名(2009年11月18日現在)。
 - 3) 「住民参画システム利用の手引き」は、<http://www.soumu.go.jp/denshijiti/ict/contents/index.html>で入手できる。
 - 4) <http://www.sns.ococo.jp/c.phtml?g=136392>
 - 5) 千代田・長岡と同様、財団法人地方自治情報センター(LASDEC)の補助事業によって、盛岡市が2007年11月に設置した地域 SNS サイト。行政と岩手大学職員有志が中心となるボランティアグループの協働で運営されているのが特徴。会員数は890名(2009年12月1日現在)。
 - 6) 【公認】岩手・宮城内陸地震に関する情報共有」http://sns.city.morioka.lg.jp/community.php?bbs_id=137
 - 7) LASDECの補助事業によって、掛川市が設置した地域 SNS サイト。「環境」「防災」などに特に力を入れており、2009年からは掛川市とNPO法人が協働で運営している。会員数は、1,973名(2009年12月1日現在)。
 - 8) <http://e-jan.kakegawa-net.jp/c.phtml?g=104686>
 - 9) 前日実績の84倍にあたる。
 - 10) 「平成の市町村大合併」に伴い、市町村合併促進のために設けられた地方債発行の制度新しい自治体が合併年度から10年間に限り、新しい自治体の財源として借り入れることができる地方債。市町村建設計画に基づく事業のうち、特に必要と認められる事業に限り使うことができるとされている。
 - 11) 座長は上田博唯京都産業大学工学部教授。筆者も委員として加わっていた。
 - 12) 地域情報の発信者であると同時に、地域づくりのディレクターとしての人材を育成するプログラム。テレビ番組を制作するプロセスが地域づくりに求められる幅広い企画力、取材力、構成力、広報力、構想力などを育てることを体験的に知った有限会社プリズムの岸本氏が考案、熊本県山江村でモデル化した。
 - 13) 地方公共団体の情報化の推進を図るため、地方公共団体の総意により1970年に設立された、総務省管轄の外郭団体。<http://www.lasdec.nippon-net.ne.jp/cms/1.html>
 - 14) 兵庫県佐用町によって、2007年度 LASDEC 補助事業で2007年10月に設置・運営された地域 SNS サイト。<http://sayo-chi.jp/> 登録ユーザー数：453名(約2/3が町外在住の登録者)、アクティブユーザー数：85名(最終ログイン1週間以内)・133名(最終ログイン1ヶ月以内)、トモダチリンク総数：4,017件、コミュニティ数：47件、コミュニティ・トピック数：796件、コミュニティ返信数：2,068件、コミュニティイベント数：38件、ブログ数：6,784件、ブログコメント数：27,011件、メッセージ数：25,090件、男女比率 男性：344名/女性：109名、平均年齢：44.7020歳(以上、2009年8月6日現在)。
 - 15) 24時間雨量326.5mm 観測史上最大の雨量を記録。
 - 16) 佐用町「平成21年台風9号災害による被害状況」(2009年10月15日集計)より。
 - 17) 全壊家屋の地区別内訳は、佐用地区30棟、上月地区105棟、南光地区1棟。
 - 18) 大規模半壊家屋の地区別内訳は、佐用地区83棟、上月地区170棟、南光地区6棟。
 - 19) 半壊家屋の地区別内訳は、佐用地区281棟、上月地区186棟、南光地区13棟、三日月地区1棟。
 - 20) 床上浸水家屋の地区別内訳は、佐用地区87棟、上月地区59棟、南光地区14棟。

- 21) 防災システム研究所 <http://www.bo-sai.co.jp/sayosugai.html>
- 22) 家屋被害は、佐用川流域の平福地区、佐用駅前地区、幕山川と佐用川の合流点の上月地区、佐用川と千種川の合流点の久崎地区に集中し、死者・行方不明者は幕山川流域の本郷地区で発生した。
- 23) 佐用町で写真サークルの代表を務める。サークルメンバー20人のうち約半数が水害に見舞われながら、記録写真を撮影。番組化されケーブルTVで放送されている。
- 24) サーバーの利用者自身でサーバーの運営・管理をしなくてもいいように、有料または無料でサーバー機のHDDの記憶スペースや情報処理機能などを、他の場所で運営管理することでサービスを提供する仕組み。
- 25) 災害が発生した場合、サービスエリア内にサーバーを設置しないという方法は、防災面において有効な手段である。
- 26) 2006年10月にリリースされた地域に特化したSNSシステム。同じエンジンをデザインを変えて地域毎に利用できるように設計されており、2009年10月現在で約30地域・団体が採用している。
- 27) 「さよっち」のインターネットTV機能「さよっちTV」は、<http://sayo-chi.jp/tv/>。
- 28) PCと携帯の双方で、投稿・閲覧ができる共通機能を有したサービス。インターネットTVは、SNSサイトとは別の専用ポータルサイトを有し、カテゴリ分類やお勧め動画など外部からも容易に利用できるよう設計されている。
- 29) 閲覧数、返信数は、2009年10月20日現在。
- 30) 「全体公開」はSNS内部のみに公開、「外部公開」はログインせずにインターネットから参照可能。
- 31) 「外部」はサイトにログインしなくても情報が閲覧できる状態、「全体」はログインしたユーザーなら誰でも閲覧できる状態、「トモダチ」は書き込んだユーザーとトモダチ関係にあるユーザーしか閲覧できない。
- 32) 被災3週間に書かれたブログを集計すると、1ブログあたりの平均閲覧数は、「外部」207.9、「全体」30.5、「トモダチ」31.2となっている（表2参照）。
- 33) 2009年10月に松江市で開催された「第5回地域SNS全国フォーラム」で、牧慎太郎・兵庫県企画県民部長が報告した。
- 34) [投稿] 投稿数, [ACC] 閲覧数, [COM] 返信数, [PHO] 写真掲載数, [MAP] 地図情報数, [MOV] 動画情報数。
- 35) サイトを訪問した利用者が、どれだけの情報ページを閲覧したかを集計した指標。
- 36) ログインしたあとに表示されるページで、ユーザーの関心情報が一覧されていることから「マイページ」と呼んだりする。
- 37) 表示された関心情報は、直接連携サイトにリンクされているので、クリックすれば情報が入手できる。
- 38) 兵庫県域を主エリアとする地域SNSで、「さよっち」は「ひよこむ」の「のれん分け」という協調分離システムによって立ち上げられた。<http://hyocom.jp/>
- 39) 2007年11月、「さよっち」とほぼ同じ時期にリリースされた島根県松江市による地域SNSサイト。SNSエンジンには、OpenSNPを採用している。<http://matsuesns.jp/>
- 40) 2006年11月、伊丹市立伊丹高校が主幹となって、情報科の地域交流授業の基盤として導入した地域SNS。OpenSNPで運用され、現実の中心市街地商店街とリンクしたモールシステムが特徴。<http://sns.itamachi.jp/>

- 41) 2007年7月、市民活動の交流・連携を目的として、三田市のNPOによって立ち上げられた地域SNS。「市民花火の復活」などに活躍している。<http://sanday.jp/>
- 42) 総務省平成20年度「地方の元気再生事業」では、「さよっち」「E-宍粟」「いたまちSNS」「さんでい」が基盤となり、佐用町、宍粟市、伊丹市、関西学院大学が主体となった交流事業を実施した。また「E-宍粟」は「モリオネット」と連携して、ふるさと財団「平成21年度e-地域資源活用助成事業」として「ふるさと文学ふれあい巡り協議会」を設立・運営し、相互交流を深めている。
- 43) OpenSNPでは、議論の流れが捉えやすいコメントツリー表示ができるので、会議型のコミュニケーションには大変便利である。
- 44) コミュニティの設置者がコミュニティ管理人となることができる。コミュニティ管理人は、ほぼ同等な権限を持った副管理人を追加することができる。
- 45) コミュニティが荒れることがないように外部公開でもログインしないでコメントを書くことは禁止している。
- 46) 「ひよこむ」では、外部公開・全員参加・公認コミュニティとして「【緊急防災】災害関連情報コミュニティ」を設置している。http://hyocom.jp/community.php?bbs_id=506
- 47) 今回の豪雨災害では、兵庫県中北部の朝来地域でも、比較的軽微だが被害があった。
- 48) RSS フィードとは、Web サイトが更新情報などをRSS (RDF Site Summary/Rich Site Summary) 形式のデータを提供すること。RSSはXMLベースのデータ形式の一種で、サイト内の新着記事の一覧や個々の記事の更新日や本文の要約などが含まれる。複数のサイトの更新状況がわかるため、すばやく情報収集することができる。
- 49) 「ひよこむ」の災害コミュニティと連携している地域SNSサイトは、横浜、三田、伊丹、尾道、宇部、館山、葛飾、熊谷、宍粟、佐用、盛岡の11地域である(2009年10月現在)。
- 50) [TOP] トピック数, [COM] コメント数, [ACC] 閲覧数, [PHO] 写真掲載数, [MAP] 地図情報数。
- 51) 姫路青年会議所は、西日本の救援物資集約拠点となり、約1ヶ月間組織的救援活動を行った。
- 52) ADSL, CATV, FTTH (光)、高速無線など広帯域でインターネットが接続できる環境。政府は、2010年度内にブロードバンドゼロ地域の解消を目指している。
- 53) 岡山県美作市(旧勝田町)から兵庫県三木市に至る活断層。日本の活断層の中では、今後30年間に地震が発生する確率が相対的に高い高いグループに属している。
- 54) 詳細は、ひよこむ内の専用コミュニティにて外部公開されている。http://hyocom.jp/community.php?bbs_id=413
- 55) 東アジアにみられる、インフォーマルな相互扶助意識。
- 56) 「コトろぐ」のように、サイト連携を前提に日常的に提供される仕組みにおいては、ひとつのサイトのひとりのユーザーによる不適切な書込が、連携サイト全体に影響を及ぼす危険性が高いので、運用に関しては高い倫理観と運用技術が必要とされる。
- 57) 千姫プロジェクトでは、他にも書き損じの年賀葉書を回収して震災で被災したイランに義援金を送る活動や、古いメガネを集めてスリランカに寄贈する活動など、積極的な社会貢献活動を通じてメンバーシップを高めている。所属会員数は、約400名(2009年11月現在)。<http://1000hime.jp/ayumi.html>
- 58) 千姫プロジェクトの呼び掛けに呼応した大阪青年会議所は、別途1万枚のタオルを集めて直接現地に届けた。
- 59) 「ひよこむ」には、約5,300名がユーザー登録している(2009年10月現在)。

- 60) 不幸の手紙のように、不特定多数の人々の間を増殖しながら転送されていくことを目的とした電子メールのこと。ネットワークやメールサーバーに過剰に負荷をかけるため、忌避される。いたずら目的のものがほとんどだが、まれに募金の呼びかけなど善意に基づくものがチェーンメール化する場合がある。
- 61) 全国規模のSNSサイトである mixi では、37件の関連ブログが確認されている（2009年8月15日現在）。
- 62) 直接被災地に送付、または持ち込まれたものを加えると、タオルの総数は約4万本に達する。
- 63) 募集期間の4日間でのべ40人近くのボランティアの方々が仕分け作業を行った。
- 64) 発信元から放射状に発信された情報を受け取った人のうち、ある程度の人数がさらに放射状の情報発信を行って、連鎖的に情報が拡大していく様子。